

トピックス

杉山伸也氏の急逝を悼む

石井 寛治

慶應義塾大学名誉教授杉山伸也氏が、急逝されたとの知らせに大変驚きました。1949年生まれの氏は、70歳台半ばとお見受けするので、まだまだ多くの研究をしてわれわれを啓発して下さるものと期待していただけに、早すぎるご逝去に、日本だけでなく世界の経済史学界は本当に惜しい方を失ったという気持ちで一杯です。

私は杉山氏より一回り先輩になり、東京大学経済学部から早稲田大学大学院に出かけて非常勤講師をしていた時は、杉山氏はロンドン大学の博士課程に在籍してグラバー商会を初めとする日英貿易を担当した商社の実証研究に励んで居られ、私が、ケンブリッジ大学に留学した1977年から78年にかけてはロンドン大学やケンブリッジ大学でお会いする機会がありました。私がケンブリッジ大学の大学図書館の資料室で、イギリス大規模商社ジャーディン・マセソン商会の帳簿や書簡と格闘していましたら、杉山氏と一緒にいたので、何を調べているのかと聞くと自分は小規模商社グラバー商会のことをやっています、と言っていました。1981年に杉山氏はロンドン大学で博士号を取得しますが、グラバー研究は博士論文の一部だったのでしょう。彼のグラバー研究は日本語でも発表されましたが、素晴らしい出来栄でした（のちに『明治維新とイギリス商人』岩波新書、1993年）。日英関係全体と日本の工業化については、英文の単著があり、そこでは、日本への経済的・軍事的外圧は日本の歴史学者が言うほど厳しくないという主張が展開されていました。私は、書評のなかで、生糸や製茶あるいは石炭といった貿易商品の内地取引は禁止規定がほぼ守られたけれども、外国商社や外国銀行による三井組や高島炭鉱への多額の投資は、危険なもので日本政府の介入によって辛うじて違法投資が回収された史実を無視してはならないと批判しました。私も若かったせいで最新の实証研究を無視したのは不味いと厳しく書いてしまい、彼自身の実証の貴重な成果を十分に評価するのを忘れるという気の毒なことをしたと反省しましたが、真面目な彼は研究史のフォローは言われるように大事だと考えられたようです。帰国して慶應義塾大学に勤めてからは日本だけでなく欧米諸国の研究成果も丹念に追いかけて、経済史の講義録をまとめた著書『日本経済史 近世一現代』（岩波書店、2012年）、『グローバル経済史入門』（岩波新書、2014年）は、私も知らないような最新の諸研究をきちんと押さえた高水準なテキストであり、合計847頁という大部なものとなりました。三田の駅から大学の教室までの坂道を重い教科書（ないしプリント）を担いで登ってゆく学生諸君の姿が目につかんでくるようです。帰国後の杉山氏は、持ち前の語学力を生かした国際学术交流を発展させ、『日英交流史1600—2000』全5巻（東京大学出版会）の編纂では、第4巻（経済編）をロンドン大学のジャネット・ハンター氏と共同で編集し、私も執筆者に加えて頂きました。第1,2巻（政治・外交編）の執筆者候補は多かったけれど、第3巻（軍事編）の日本側執筆者はなかなか見当らなかったこと、第4巻（経済編）はその中間だったことが印象的でした。世界綿業市場での日英間競争については、準備研究会にイギリス綿業史の権威であるファーニー博士を杉山氏が呼んで下さったところ、私の報告した横浜正金銀行と三井物産会社の活動が自分も重要な競争力の決め手だと思いと賛意を表して下さったことが嬉しかった

です。これも杉山氏の視野が大きく広がったことを示すものでしょう。

杉山氏自身が日本に帰ってからとくに新しく選んだ研究テーマは、いわゆる情報史でした。西川俊作・山本有造編『日本経済史5 産業化の時代 下』（岩波書店、1990年）に掲載された「情報革命」は、歴史叢書としては初めて「情報革命」を単独のテーマとして取り上げたもので、その執筆者に杉山氏が選ばれたのです。その背景には、いわゆるマイクロ・エレクトロニクス革命（ME革命）が進行中であった世界史的状況があったことは言うまでもありません。そうしたME革命が、情報処理機構の発展を利用した支配者が社会全体を自在にコントロールする可能性について、1949年刊行のG・オーウェル『一九八四年』に書かれているようになると断定するべきではないという研究者の意見もありましたが、歴史の事実がどうであったかを究明する研究が必要だとする意見が強まってきました。そこでは、19世紀における産業革命が市場経済を土台とする資本主義社会を出現させたのと匹敵する根本的な変化が20世紀末にかけて生まれつつあるという意見が提起される反面で、ME革命は19世紀の産業革命を構成する情報面での革命の不足を補いつつあり、市場経済が一層効率化しつつあるに過ぎないという意見もむしろ多数を占めました（竹内啓『高度技術社会と人間』岩波書店、1996年、など）。何れにせよ、情報史の研究が遅れている状況を克服しようという意見が強まり、近代日本の通信史の発展を郵便・電信・電話についてトータルに把握しようとする上記杉山論文は大きな影響を与えました。私も杉山論文が総合的な分析であるけれども、日本では通信省がどのようにして通信手段を供給したのかが主要な分析であって、通信設備の充実が通信手段の利用者である人々の活動や暮らしを如何に向上させたのかを調べる必要があると考え、『情報・通信の社会史—近代日本の情報化と市場化』（有斐閣、1994年）という本を公刊しました。以後、小さな研究会がいくつも組織され、論文集なども刊行されるようになりました。拙稿「日本郵政史研究の現状と課題」（『郵政資料館研究紀要』創刊号、2010年）には、杉山氏と協力して作った郵政歴史文化研究会の研究年報に執筆した研究史整理を収録し、その後の詳しい研究史は、杉山伸也『近代日本の「情報革命」』（慶應義塾大学出版会、2024年）に収録されています。最近のロシアと中国の政府による民衆への情報開示の制限は、日本やアメリカにも広がっており、情報史研究は権力者による情報のコントロールというオーウェル流の暗黒世界を如何に打破すべきかを考えながら行うことが必要となっています。そうした時に、情報史研究を指導されてきた杉山氏の逝去は誠に残念としか言いようがありません。それぞれが氏の志を受け継ぎながら少しでも前進するように努めたいものです。

（いしい かんじ 東京大学名誉教授）